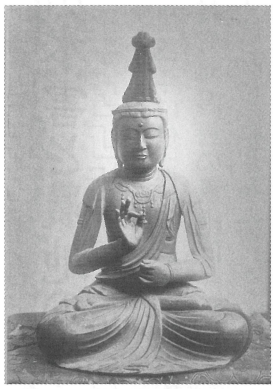
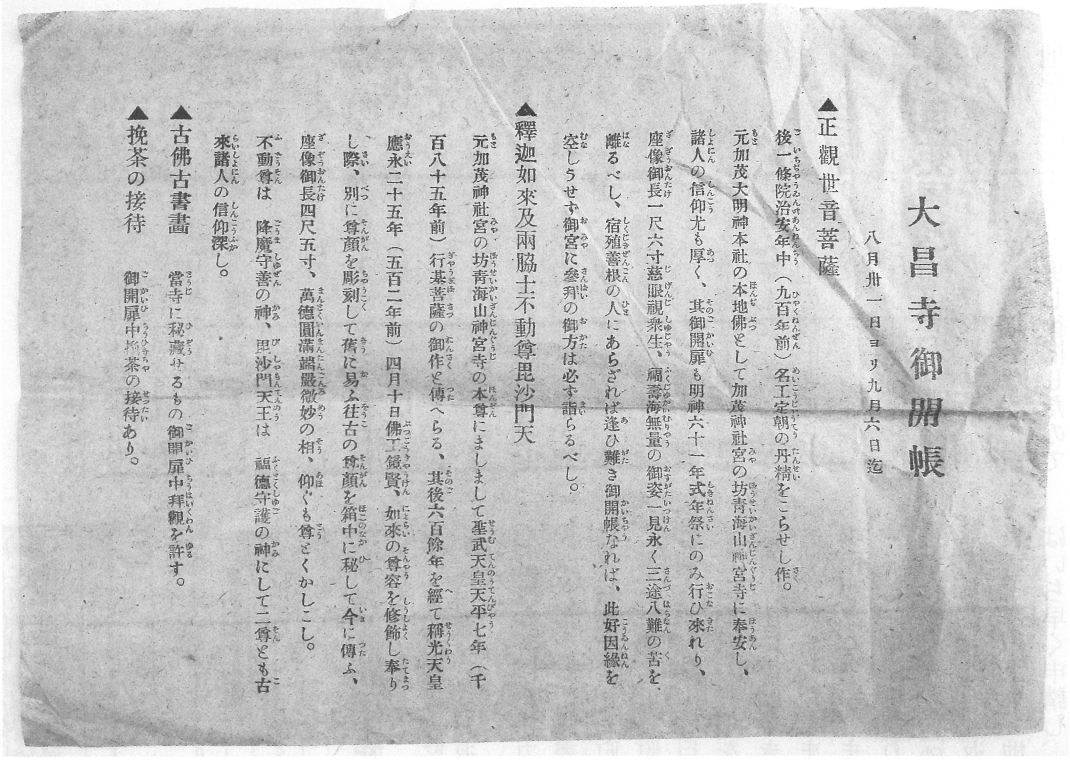
かも市史だより

令和4年12月
No.45

◆編集発行　加茂市幸町二丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室　☎0256(52)0080 内線480

■　大昌寺の宝物開帳と社会教化活動　■





大昌寺御開帳

八月卅一日ヨリ九月六日迄

▲正觀世音菩薩

後一條院治安年中（九百年前）名工定朝の丹精をこらせし作。

元加茂大明神本社の本地佛として加茂神社宮の坊青海山神宮寺に奉安し、諸人の信仰尤も厚く、其御開扉も明神六十一年式年祭にのみ行ひ來れり、座像御長一尺六寸慈眼視衆生、福壽海無量の御姿一見永く三途八難の苦を離るべし、宿殖善根の人にあらざれば逢ひ難き御開帳なれば、此好因緣を空しうせず御宮に參詣の御方は必ず詣らるべし。

▲釋迦如來及兩脇士不動尊毘沙門天

元加茂神社宮の坊青海山神宮寺の本尊にましまして聖武天皇天平七年（千百八十五年前）行基菩薩の御作と傳へらる、其後六百餘年を經て稱光天皇應永二十五年（五百二年前）四月十日佛工鍵賢、如來の尊容を修飾し奉りし際、別に尊顔を彫刻して舊に易ふ往古の尊顔を箱中に秘して今に傳ふ、座像御長四尺五寸、萬德圓滿巍巍微妙の相、仰ぐも尊とくかしこし。

不動尊は　降魔守善の神、毘沙門天王は　福德守護の神にして二尊とも古來諸人の信仰深し。

▲古佛古書畫　當寺に秘藏するもの御開扉中拜觀を許す。

▲挽茶の接待　御開扉中挽茶の接待あり。

▲　**開帳のチラシと宝物**（チラシは加茂市教育委員会所蔵小富薬局文書、観音菩薩像・釈迦如来像の写真は新潟市文書館所蔵斎藤秀平家文書）

大正九年（一九二〇）九月、青海神社では六十年ごとの大祭（六十一年式年祭）を執行しました。これに合わせ、曹洞宗大昌寺（松坂町）住職の西村大串（一八八三～一九六〇）は仏像などの宝物を開帳しましたが、その動機は広く社会教化を見据えたものでした。

前年に信徒へ向けた講話で、大串は大昌寺の観音菩薩像が加茂明神の本地仏であったこと、釈迦如来像が青海神社神宮寺の本尊だったこと、両像は明治元年（一八六八）に寺へ遷されたことなどを語り、明年の六十一年式年祭で盛大に開帳すると伝えています（『玉典山日誌』大正8・9・25）。大正二年に住職となって以来、大串は寺院の将来に一抹の悩みを抱き、その能力をどう活用するか考えていました（『大法輪』昭和十年十二月号）。青海神社との由緒を重視した開帳の行事から、仏教の発展を目指した大串の姿勢をうかがえます。

九月六日に開帳を終えた大串は、同月十日には慌ただしく加茂朝学校（のち加茂暁星高校）の開学を迎えます。早朝四時半に大鐘をついた大串は、その胸中を「この鐘こそ余が数年来心掛けし暁の鐘、県下六百の寺院に目醒めよとつくなり」と書いています。大正十年には葵幼稚園を開園し、十二年には葵博善会（加茂地区保護司会の前身）の会長を勤めるなど、この時期の大串は、仏教に求められ始めていた社会的要望へ積極的に応えました。

（松坂町　川崎裕也）

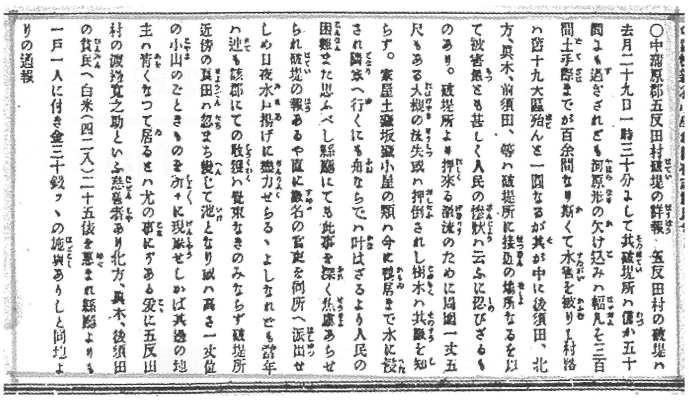
たび重なる信濃川水害と農地の復旧

明治十四年（一八八一）・十五年に信濃川左岸の堤防が決壊し、土砂が流入して五反田村や北潟村の農地は一変しました。ここでは、水害から農地がどう復旧したかを考察します。

信濃川の堤防決壊

明治十四年（一八八一）四月三十日、信濃川左岸の五反田村地内で堤防が決壊しました。破堤したのは五〇間（約九〇メートル）で、後須田村・北潟村・前須田村及び真木新田・兎新田・古川新田（新潟市南区）などを広く濁流と土砂が覆いました。翌月二十日、この災害を報じた新聞は、「良田はたちまち変じて池になり、あるいは高さ一丈（約三メートル）くらいの小山のごときもの所々に現象せし」と被害の一端を記しています（『近現代』九三）。

小山のごときものとは、砂山でした。のちに北潟村の小林弥五郎が漢文体でまとめた「暴水記」では、砂山はもっとも高い場所で八尺（二・四メートル）に及び、数百か所もできたとしています。江戸時代を通じて、信濃川の左岸沿いでは湿地を埋め立て、田畑への改良を進めていました。罹災した白根郷の上流部は、水害が起きても水の引きが早く、農作物が水に浸かる被害は下流部ほど多くはありませんでした。ところが、この破堤により荒地の復旧を迫られることになりました。

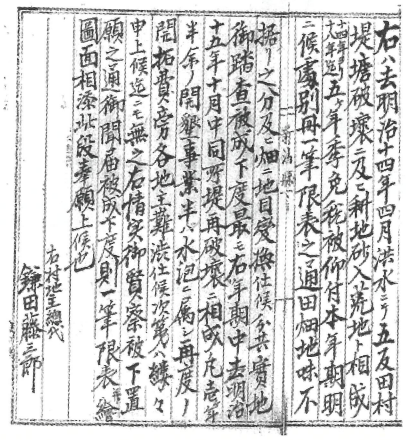


○中潟原郡五反田村破堤の詳報　五反田村の破堤ハ去月二十九日一時三十分ヨリ其破堤所ハ僅カ五十間ヨリ過ぎされども河原形の欠け込みハ幅凡そ三百間土手際まで百余間なり斯くて水勢を被り一村浴ハ皆十九大區殆んと一圓なるが其が中に後須田、北方、真木、前須田、等ハ破堤所に接近の場所なるを以て被害最も甚しく人民の惨狀ハ云ふに忍びざるものあり。破堤所より押来る濁流のために周圍一丈五尺もある大樹の流失或ハ押倒されし樹木ハ共數を知らず。家屋土蔵坂蔵小屋の類ハ今に殘居まで水に浸され隣家へ行くにも舟ならでハ叶はざるより人民の困難せた思ふべし縣廳にても此事を深く憂慮あらせられ破堤の報あるや直に數名の官吏を例所へ派出せしめ日夜水ハ揚げに盡力せらるゝよしなれども當年ハ迚も該郡にての駐殺ハ覺束なきのみならず破堤所近傍の耳田ハ忽ち變じて池となり砂ハ高さ一丈位の小山のごときものを所々に現象せしかば其邊の地主ハ苦くなつて居るとハ尤の事にがある変に五反田村の渡路寛之助といふ熱篤者あり北方、真木、後須田の貧民（白米（四二人）二十五俵を恵まれ縣廳よりも一戸一人に付き金三十錢ヲ、の施與ありしと同村よりの通報

▲五反田村の破堤を報ずる記事（『新潟新聞』明治 14.5.20）

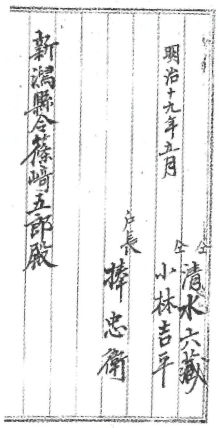
地目変更と地租の軽減

罹災した農村は、荒地となった農地をどのように把握し復旧したのでしょうか。明治十九年に北潟村が新潟県へ提出した願書より、まず面積に注目すると、一町九反一畝七歩のうち、約半分の一町七畝二歩が田には適さず、畑に地目変更されました。



右ハ去明治十四年四月洪水ニテ五反田村堤塘破壊ニ付耕地砂入荒地ト相成ル其年迄五ヶ年毎免税被仰付本年期限ニ候處別冊一筆限表之通田畑地味不揃ニ付及ニ畑ニ地目変換仕候ニ付實地御踏査成下度尤ハ右年間中去明治十五年十月中同所堤再破壞ニ相成元亀年半ノ開墾事業半ハ水泡ニ属シ再度ノ開拓費等各地主難渋仕候次第ハ縷々申上候迄モ無之右情況御賢察被下置願之通御聞届被成下度尤一筆限表ハ絵圖面相添此段奉願上候也

右村住総代
鈴田藤三郎



明治十九年九月

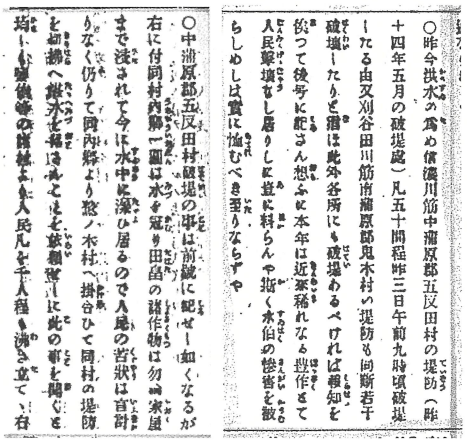
清水六蔵
小林吉平

庄長
棒忠衛

新潟縣令篠崎五郎殿

▶北潟村の願書（砂押新田　小林正幸氏所蔵「荒地起返御見分願」）

次に地目の詳細をみると、土砂を除き、田に復旧できた場所がある一方で、埋まったまま畑に転換された場所があります。また、地価に着目すると、畑は田よりも約四割安く算定されています（砂押新田　小林正幸氏所蔵「荒地起返地価取調一筆限表」）。このため、地目変更する農地はいち早く申請し、地租の負担を抑えたかったことがうかがえます。



○中潟原郡五反田村破堤の事は前號に記せし如くなるが右に付同村内部一圓は水を冠り田畝の諸作物は勿論家屋まで浸されて今は水中に深ひ居るので人民の苦狀は言尋りなく仍りて同所より悠ノ本村へ掛合ひて同村の堤防を切拂へ排水を稱はれたるを該郡役所に此の事を聞くを埒いも嘗後時の時機より人民凡そ千人程も湧き立てい存

▶五反田村の破堤（右：『新潟新聞』明治15・10・4、左：同10・7）

しかし、復旧への努力は、自然災害の前に円滑には進みませんでした。この間、明治十五年十月に再び信濃川洪水が起こり、前年に破堤した場所が切れました。そのため、北潟村では約一年半の開墾がなかば水泡に帰したとし、新潟県に提出していた二か年の免税を、十八年まで五か年に延長するよう願い出て、その後も税率を低くするよう求めています。

そののちも復旧の開墾は続き、徐々に荒地の面積は少なくなりました。一部の畑は、明治三十二年にようやく田へ戻しています。農地の復旧は行政への免税の請願と並行して実施し、なるべく田へ戻そうとしたことがわかります。

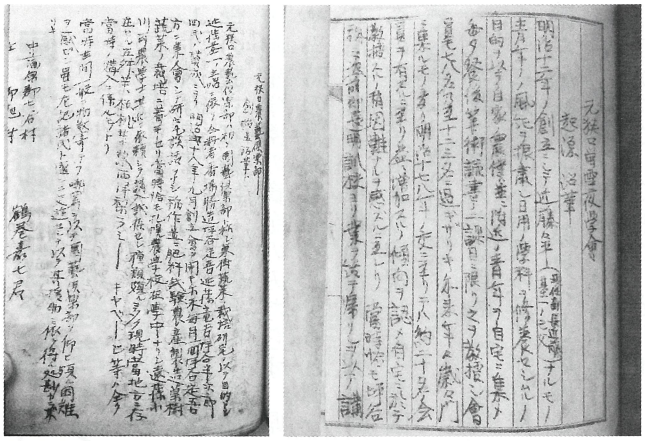
（近現代部会　勝本幹夫）

元狭口の青年会活動

戦前から戦後にかけて、村や集落ごとに青年会が組織され、盛んな活動を展開しました。しかし、具体的な中身はあまり知られていません。ここでは、元狭口での活動を紹介します。

元狭口の青年会

青年会とは、名前の通り青年たちが集まり作った組織で、その起源は江戸時代に若者組などと呼ばれた集団とされています。やがて、日露戦後には、明治政府による農業振興や民心向上などを目的とした地方改良運動に取り込まれていきました。

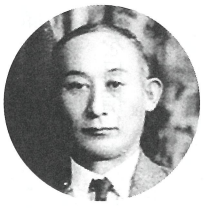


▲ **青年会の沿革**　右：元狭口蛍雪夜学会、左：元狭口農芸倶楽部（各新潟市文書館所蔵）

元狭口の青年会活動を推進したのは、近藤基一（一八七九～一九四四）でした。集落には、明治十二年（一八七九）に創立された夜学会がありました。当初は、近藤家で夕食後に算術・読書の二課目を、少数の会員に教えていました。明治十七、八年頃には約二〇名になり、その後も増えて手狭になり、講舎を金泉寺（元狭口）に移しました。このときに科目も増やし、元狭口蛍雪夜学会と称し、協調性の修養・旧弊の改善や勤倹貯蓄など、国家的要請に沿った目標を謳い始めるようになります。

やがて元狭口では、すべての青年が夜学会へ入会するようになりました。特徴的なのは、中等学校等への進学者も入会するとされた点で、全寮制を原則とした加茂農林学校の生徒も加入しています。

集落には、果樹や蔬菜の栽培・研究をする有志の団体がありました。明治二十八年に満十六歳の近藤基一が主唱してできた組織で、当初会員は数名のみでした。しかし、のち応召された基一が除隊となり、明治三十五年に帰郷すると熱心に各家へ入会を勧め、集落の有力者へも理解をうながし、翌年には全戸を会員とする元狭口農芸倶楽部が誕生します。日露開戦を支持する世論が強かったといわれる当時の社会で、従軍経験を経て彼の発言力は強まったのでしょう。こうした経緯をみると、すべての青年が夜学会へ加入する仕組みを主導したのは基一だったと思われます。

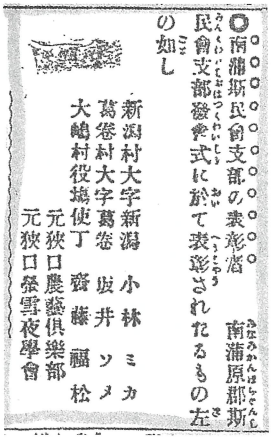


▲ **近藤基一**

青年会活動の変質

夜学会は、夜間勉学に励むだけでなく、農村生活の刷新にも勤しみました。彼らは、江戸時代以来徒党を組む若者が重立に要求した「追い上げ休み」と呼ばれる慣行を悪弊と否定し、賭け事を金銭浪費と退け、労働を神聖なものと重視しました。村の公休日や盆中を利用し、里道や通路の修繕など村落の共同作業を買って出て、賃銭を夜学会の基本金に充てるなどしています。

明治四十年八月に実施された盆中の作業は、夜学会員と農芸倶楽部員が共同して参加していました。明治四十二年、南蒲原郡斯民会から三名の個人と並んで表彰されたとき、農芸倶楽部と夜学会は対で受賞しています。二つの団体は個人的で、各々異なる動機から始まりましたが、国家主義の高まりに並行し、世代の全員や全戸からの加入に意義が見出されるようになると、目的も変質していきました。



南蒲原郡斯民會支部の表彰酒　南蒲原郡斯民會支部發會式に於て表彰されたるもの左の如し

新潟村大字新潟　小林ミカ
葛巻村大字葛巻　坂井ソメ
大鳴村役場使丁　齋藤福松
元狭口農芸倶楽部
元狭口蛍雪夜學會

▶ **農芸倶楽部と蛍雪夜学会の表彰**（『新潟新聞』明治42・8・4）

さらに明治四十三年、近藤基一を会頭に、元狭口など一〇集落・九団体が集まり、元狭口青年連合会が発足します（『新潟新聞』明治43・4・23）。四月に開かれた発会式で、彼らは加茂農林学校や南蒲原郡役所で重職に就く人物を来賓に迎えており、もはや青年だけで完結する組織ではなくなりました。こうして、緩やかな地縁から出発した夜学会や農芸倶楽部は、国家や社会といったより巨大で、抽象的な組織の末端に吸収されていきました。

（上条　加藤大輔）

県央地域に巻き起こった四年制大学設立運動
～新潟経営大学設立への歩み～

「産官学民」。当時のキャッチフレーズが示すとおり、新潟経営大学の設立事業は、母体となった加茂暁星学園の資金のみならず、県や当時の県央を初めとする近郷一八市町村と、多数の企業、個人からの寄付金により実現した、全国でも珍しい取り組みでした。

大学設立の大きな目的は、当時、大学に進学する若者の多くが首都圏を始めとする県外へと流出し、結果、優秀な労働力の県外流出につながっていく中で、その傾向に歯止めをかけ、県央の地場産業振興を担う人材を確保することにありました。四年制大学の開学と若者の定着は、ひいては、地域の文化向上と県央地域の総合的な発展に、大きな役割を果たしてくれるものと期待されたのです。

◀ 新潟経営大学設立期成同盟会のパンフレット

設立運動の始まりは、三条市からでした。平成二年（一九九〇）三月に「県央に四年制大学をつくる三条市民の会」が発足。それ以前から、三条市においても四年制大学の新設が検討されていたようですが、新設は当時の文部省の規制が厳しく、それなら隣の加茂市の新潟中央短大を、四年制に昇格させた方がよいとの意見に集約されたとのことです（太田大三郎『加茂川の流れ』）。

その後、「同・加茂市民の会」、「田上町民の会」、「栄町民の会」、「下田村民の会」が相次いで発足、各市町村民の会では署名運動を展開。五市町村で合計一六万二千人の賛同を得ました。

▲ 葵橋にかけられた市民の会による横断幕

これに呼応し、県央を中心とする当時二七の市町村議会で運動の支援を議決。企業や自治体も横断幕でアピールするという、文字通り「産官学民」一体となった一大ムーブメントが沸き起こりました。

文部省の大学新設抑制の方針もあり、当初は新潟中央短大の四年制昇格を予定していましたが、短大存続のニーズも大きかったため、幼児教育科を残して短大は存続、商業科を廃止して四年制大学を新設する方針に変更されました。

大きなうねりとなった四年制大学設立運動を集約し、最大の課題であった四〇億円余りに上る設立資金の工面等を計画的に推進するため、平成三年二月、県央を始め当時の周辺一八市町村の自治体・議会・商工会・市民の会の代表による期成同盟会が設立、資金の確保を目指しました。

結果、加茂市一三億円、三条市七億五千万円、田上町三億円、燕市二億二千万円、ほか周辺一四市町村で一億五千万円、新潟県一一億円となり、約三八億円の見通しが立ったのです。

学園は同窓会を中心に、教職員ほか関係者から寄付を募りました。加茂市もまた企業や一般市民から募集し、その総額は約三億三千万円に達しました。

平成四年四月、私は加茂市役所から出向し、中央短大内に設けられた「四年制大学開設準備室」で文部省申請書類の作成に追われていました。そして迎えた七月の申請当日、当時の相田理事長、西村学長、落合準備室長とともに、私はワープロを担いで上京。文部省で指摘された事項をすぐに修正し、無事提出することができました。

翌平成五年（一九九三）十二月、県央地域住民待望の「新潟経営大学」は、幾多の困難を乗り越え、文部大臣から認可されたのです。

（近現代部会　齋藤　淳）

表　市町村等の寄付金

市町村	金額（千円）
加茂市	1,300,000
三条市	750,000
燕　市	220,000
田上町	300,000
分水町（燕市）	4,000
吉田町（燕市）	7,700
寺泊町（長岡市）	3,000
栄町（三条市）	5,400
岩室村（新潟市西蒲区）	3,000
弥彦村	2,600
下田村（三条市）	7,500
新津市（新潟市秋葉区）	24,800
白根市（新潟市南区）	13,100
五泉市	14,100
小須戸町（新潟市秋葉区）	4,100
村松町（五泉市）	8,200
見附市	5,900
中之島町（長岡市）	1,600
新潟県	1,100,000
加茂暁星学園　他	619,667
合　計	4,394,667

総務課資料より作成